

第75回 防災（と）アレルギー

IT生

今年7月、熱海で土石流が起こり、多くの人が巻き込まれた。現時点では、豪雨と盛り土の流出が直接原因とされている。もっとも、盛り土を放置し、防災対策に取り組まなかった市の責任はかなり大きそうだが。

その、熱海の被災地で、救援のため、食料を送った主から聞いた話。件の救援者は、防災缶詰を製造している高知県黒潮町役場。ここの防災缶詰は、東日本大震災の経験も取り入れ、7大アレルギー対応となっている。この缶詰を熱海にも送った。そして受け取り人となった現地の住民から以下のような報告があった。



厳格な工程管理のもと7大アレルギー対応の防災缶詰を製造する高知県黒潮町の工場

アレルギー対応の需要を現地でできくと、大人たちは「少子高齢化のここでは、子供に多いアレルギー対応などは必要ない」、子を持つ母親たちは「なんとかしますので」といわずらそうだったという。いわずもがな、食物アレルギーはときに命にかかわる。ましてや、粉塵が舞い、衛生状態が悪化している被災地では、避難生活が長引くほど、おろそかにされる問題ではない。

現地ではこんな反応であったというが、防災缶詰を現地で配布した人によると、この話をききつけた横浜の人がわざわざ現地を訪れ、「災害時もアレルギー対応が必要であることをアピールしてくれて感謝する」と告げたという。やはり、災害時のアレルギー対応はひとつの課題だったのである。

防災は、日常生活の延長で考えるべき問題だ、とあらためて感じた。避難意識にしろ、日常からの意識と備えなくして急に生まれるものではない。避難生活への備えを欠くと、容易に命を落としてしまうことは近年の災害で関連死が多いことからわかる。

災害が多すぎて、防災を考えることにアレルギーすら感じている雰囲気もあるが、それは、頻発する災害のせいではなく、みかけの便利さに乗じた、ともすれば予定調和が過ぎる日常生活への警鐘と感じるべきではないか。

(令和3年10月)